

コラム

三浦綾子「銃口」を読む

脳出血後のリハビリ療養の中で

金融・労働研究ネットワーク事務局 田中均

リハビリにがんばっています

突然身体の右半分がマヒ状態になってしまいました。8月20日土曜日の出来事です。朝ごはんは普通に食べました。前日からの疲れが残っていたので自室に戻って横になりました。11時過ぎころ、身体に異常を覚えて右手右足が普通に動かないことに気がつき、家族に助けを求めました。救急車で脳神経外科に運ばれMRI検査を受け脳内出血による麻痺と告げられました。

入院当初の3日間くらいは右手右足がほとんど動かず、食事も出来ない状態で切れ目なく点滴を受けました。その後、身体はじょじょに動くようになり3週間後にはリハビリの病院に移りました。この間、身体が動くようになるにつれて本を読む時間が出来て三浦綾子の小説をいくつか、たて続けに読みました。三浦綾子というと「氷点」が思い浮かびます。僕が中学のころテレビドラマにもなりました。

三浦綾子は「氷点」のような人間の「原罪」というのがキリスト教的な悩み・葛藤のイメージが強いのですが、今回、「海嶺」「母」「銃口」を続けて読んで認識を改めました。「海嶺」は江戸末期に嵐で遭難し、1年以上漂流した後に助かった3人の日本人がイギリス、マカオを経由して日本に帰ろうとする。しかし当時の江戸幕府の外国船打ち払い令のもとで帰国が出来なかったという「モリソン号事件」を題材にしたものです。奇跡的に助かった3人の日本人が、生活の隅々までにキリスト教の教えが支配するイギリスやアメリカの社会に触れキリスト教に染まりそうになりながら、同時に江戸幕府のキリスト教弾圧の恐怖におびえるところは三浦綾子らしいと納得します。

しかし、そこにとどまる事なく例えば、3人の日本人はイギリスの戦艦に同乗してロンドンに

行きます。その戦艦の中で兵と将校と身分の落差の激しさ、兵に対する残酷な懲罰の厳しさが描かれています。それは貴族と貧困な庶民というイギリス階級社会の矛盾を認識させます。特に反抗的な兵士が神をもうらむ言葉を繰り返すところはキリスト教の理想と階級社会の矛盾を示します。「母」は小林多喜二の母親の思いを小説にしたものです。多喜二の家族への想いやりや、売春宿に身を落とした女性を救い出す多喜二の一途さが、拷問で殺されて家族の元に返された多喜二の遺体と重なります。

三浦綾子のイメージが一変

「銃口」を読み、三浦綾子への認識を大きく変えました。物語は戦前の天皇制のもとで、他の人々と同じようにごく自然に天皇制を受け入れていた主人公竜太が、生徒をあるがままに受け入れる素晴らしい教師坂部先生に出会い、坂部先生のような教師になることを目指します。竜太は師範学校を卒業して教師になります。そして生徒を愛し教育育てることに夢中になっている中で、「思想犯」とされ「特高」の過酷な取調べを受けます。敬愛する坂部先生が「綴り方運動」に参加していたことによるのですが、坂部先生は過酷な拷問を受け竜太自身も理不尽な取調べを受ける。竜太は長期間の拘束の後に釈放されるが、兵士として招集され思想犯の経歴を待った兵士として満州に行かされる。

ここまでのあらすじで、貧しい中で生活する人々や子供たちを深く思いやる視線がとりわけ印象的です。竜太が小学生のときの同級生の芳子は、早朝納豆売りをして貧しい家族を支えるのだが、坂部先生がそのことを知っていて芳子を支え、質屋を営む竜太の家も毎朝納豆を買う。芳子もやがて教師となり、竜太にとってかけが

えのない女性となっていくのだが、貧しさの中でもひたむきに生きようとするものと、それを暖かく支える人々が物語の重要な構成人物となっています。

今日の不当逮捕・取調べと共通する「特高」の取調べ

竜太に対する「特高」の取調べの様子は非常に多くのことを考えさせられました。竜太が何の容疑で、なぜとらわれたのか、他に誰がとらわれたのかなどの情報はいっさい知らされません。同じときに別の場所で拘束された坂部先生のように猛烈な拷問を加えられることはありませんが、理不尽極まりない取調べを受けながら外部との接触はいっさい断たれる。このやり方は現在も何らかの事情で不当逮捕されたものに対する取調べと共通するものがあります。逮捕されてしまうと、いっさいの情報は逮捕した権力の側の都合の良いように操作されて与えられます。それが続くと理性的に考えることができなくなります。親しい友人が不利な証言をしたかのようにほのめかされても、それを自分の中で否定できなくなります。

刑事の言っていることが本当かもしれない。普通に生活してきたものならそういう思いにとられることがあるものです。そういう思いに落ち込むように、与えられる情報が操作される。現在は、不当な逮捕者が出ると民主団体や救援組織の弁護士が駆けつけ、どういう状況になっているか知らせてくれることもあるでしょう。それは孤立して捕らえられたものには大変大きな力を与えます。

それでも、警察に拘束されると彼らと接する時間のほうが圧倒的に多いのです。取り調べる側は巧妙な演出もします。

竜太は、かろうじて差し入れられる品物が家族からのものであることを確信して自己を維持します。戦前の治安維持法の下での「特高」による取調べと、現在の警察権力による取調べを同一視は出来ませんが、逮捕拘留された者と取調べをする権力との関係ではまったく共通するものがあります。

この後竜太は兵士となり物語は満州へ移ります。そこで竜太が何を体験するか。小学校のと

きに同じクラスで坂部先生の教えを受けた芳子とのロマンスがどうなっていくのかは、ぜひ読んで確認してください。

後書きによると「銃口」は「昭和を背景に神と人間を書いてほしい」という依頼を受けて小学館「本の窓」誌に1990年1月号から1993年8月号まで連載されたものとあります。昭和の時代が終わった後に、その時代の中に何を見るか。「銃口」はひたむきに生徒を愛した教師が、天皇制の絶対権力に翻弄される中に昭和の時代を描きました。

この昭和の時代が過去のものとして受け止めきれない時の流れを感じると言ってしまうは言い過ぎでしょうか。昭和の戦前の時代を肯定する勢力が力を増しているように思います。基本的人権を高らかに掲げた日本国憲法を守ろうとする力には力強いものがあります。しかし、竜太に対する「特高」の取調べの様子を読むとき、この部分ではまったく同じことが現在も行われうることを強く思いました。その意味でも日本国憲法の基本的人権を守り発展させていく気持ちを強くしました。